

サビエル生誕五百年

巡礼の道

152

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

「比」に魅せられる

狭い路地の大勢の子ども。皆、目が輝いている。明るく、人なつこい子どもたち。貧しい生活に強いられるフィリピンの子どもはなぜこんなに輝いているのか。

だろ。うか。二十八年前の一九八一年、初めてフィリピンのスラムを訪ねた時の印象である。そして、フィリンが好きになった。それは私だけではない。



フィリンで働く山本さん

山口・島根地区のカトリック教会の参加者で宇部教会の最年少の参加者、二十歳の山本雅子さんもその一人である。彼女は春、短大

土産にもらったフォークとスプーン



を卒業し、幼稚園への就職が決まっていた。初めてのフィリンへの旅で、私同様フィリンに魅せられ「このまま、この国に留まりたい」と言った。

しかし、幼稚園の先生になることが決まっておき、今さらやめるわけにもいかない。しばらく日本の幼稚園に勤めたあとフィリンで働くことに決めたという。

それは一時的な感情ではなく、二年後に幼稚園をやめ、フィリンに渡った。当時、マニラには日本からの企業進出や売春ツアーで、大勢の日

本人がいた。その結果、現地で日本人が関わるトラブルがたくさん起きた。フィリンのシン枢機卿は、フィリンに詳しい西本至神父(レデンブートル会)に、トラブル解決に働いてくれるように依頼した。山本雅子さんは、その西本神父の秘書として働くことになった。

以来、今日まで結婚もせず、フィリンでいろいろな面で活動している。フィリン訪問が、彼女の人生を変えたのである。今回、マニラで一緒に昼食を食べながらフ

フィリンの魅力とは何だろうかと考えさせられたが、それは「貧しさ」の中にあるような気がする。

スラムでのホームステイで部屋には木製の大きなフォークとスプーンの飾り以外何もなかった。覚えていた英語の単語を並べ「オー・ワンダフル、ラージ・フォーク、スプーン」と言い、座を盛り上げようとした。

翌日、別れを告げる際、私のカバンにそのフォークとスプーンが入れていた。プレゼントだと言う。自分は台所の机の下で寝ても、私をホームス

テイさせてくれた貧しい人たち。貧しいことが「共に生きる」「感謝する心」を自然に育むのだろうか。

物質的に豊かになった日本で失われたものが、フィリンの貧しい人たちの中であつたような気がする。そして、山本雅子さんの顔も輝いて見えた。

(元山口放送取締役ラジオ局長)



西本神父のフィリン

よもやま話の本